

獣医師生涯研修事業のページ

このページは、Q & A形式による学習コーナーで、小動物編，産業動物編，公衆衛生編のうち1編を毎月掲載しています。なお，本ページの企画に関するご意見やご希望等がありましたら，本会「獣医師生涯研修事業運営委員会」事務局（TEL：03-3475-1601）までご連絡ください。

Q & A 小動物編

症例：猫，スコティッシュフォールド，雄，1歳10カ月齢，体重3.6kg

主訴：左右の角膜が黒色に変化しているとの主訴で来院した。

病歴・現症：約5カ月前に同居猫と喧嘩の後，両眼の結膜炎を発症した。一度，結膜炎は治癒したとのことである。結膜炎発症時から食欲の減退が見られている。自宅で観察する限りでは，視力はあるようである。初診時，眼瞼・眼球結膜の充血・浮腫及び黒色部に向かい角膜の血管新生が確認された。治療開始から約1カ月半後の右眼の外貌を図に示した。結膜の充血・浮腫及び角膜の血管新生は快方に向かったが，角膜の黒色部には変化が見られなかった。



図 右眼外貌

質問1：この疾患の病態を説明しなさい。

質問2：この疾患の治療法を説明しなさい。

(解答と解説は本誌243頁参照)

解 答 と 解 説

質問1に対する解答と解説：

この疾患は、「黒色壊死症」と診断される。黒色壊死症は、角膜上皮及び実質表層の局所的な壊死で、角膜実質深部にまで及ぶ場合もある。黒色壊死症は猫にまれに見られるが、犬では確認されていない。

原因に関しては、現在のところはっきりとしていない。しばしば慢性的な角膜の潰瘍病変に続発すると考えられている。また、猫ヘルペスウイルスの関与も指摘されている。その一方で、全く角膜潰瘍の病歴のない猫においても発症する場合がある。

臨床的には、黒色病変の周囲に角膜の潰瘍を伴う場合がある。これらの病変はしばしば疼痛を伴う。このため、臨床症状として羞明あるいは流涙を呈する場合がある。病変周囲には血管新生、浮腫及び白血球の遊走が観察される場合もある。

質問2に対する解答と解説：

黒色病変は、ごくまれに自然に脱落することがある。炎症をコントロールする目的で抗炎症剤の点眼

薬が選択される場合がある。ステロイド系抗炎症剤の使用は、ヘルペスウイルスの関与あるいは重度な細菌感染を伴う場合には慎重に行うべきである。ウイルス感染が強く疑われる場合、抗ウイルス薬が有効となる場合がある。

通常、治療の第一選択には外科手術が選択される。外科手術の内容としては、壊死組織の切除（角膜表層切除）が必要である。また、切除部位が広範囲にわたる場合には有茎結膜弁移植等も考慮する必要がある。

本症例ではヘルペスウイルス抗体価は高値を示さなかった。このため、ステロイド系抗炎症剤の点眼により角膜及び結膜の炎症は快方へと向かった。

しかしながら、黒色壊死部には縮小が見られないため、今後、壊死組織の除去及び切除部への有茎結膜弁移植を予定している。

キーワード：猫，黒色壊死症，角膜表層切除，有茎結膜弁

※次号は、産業動物編の予定です